観念的発想の陥穽

大西巨人文藝論叢

下

立風書房

大西巨人文藝論叢　下巻

観念的発想の陥穽　下巻
昭和六十年五月十日初版印刷
昭和六十年五月二十一日初版発行
著者　大西巨人
発行者　下野博
発行所　株式会社立風書房　東京都品川区東五反田三丁目六番地十八号　郵便番号一四一
電話番号（四四七）一一九一番（代表）
振替東京五―七四四九三
本文印刷　信毎書籍印刷株式会社
製本所　難波製本株式会社
定価　三八〇〇円

大西巨人文藝論叢下巻目次

第一　「撩乱たる空虚」への傾斜

三島由紀夫　一　凶事ありし室（へや）……一〇
　　二　模糊たる太陽……一四
堀田善衛　　戯曲『運命』の不愉快……一七
横光利一　　横光利一の死……二三
武田泰淳　一　内在批評と外在批評との統合……二六
　　二　「撩乱たる空虚」への傾斜……四九
　　三　現代「滑稽的」小説……五四

第二　公人にして仮構者の自覚

佐藤春夫　一　公人にして仮構者の自覚……七〇
二　「過去への反逆」一例……八三
泉　鏡花　鏡花の女……八五
谷崎潤一郎　一　谷崎潤一郎のこと……九〇
二　指定疾患医療給付と谷崎賞……九三
井上ひさし　「有情滑稽」の問題……一〇一
志賀直哉　一　作中人物にたいする名誉毀損罪は成立しない……一〇九
二　文芸における「私怨」……一一三
三　学習院と渡良瀬川鉱毒事件……一一六
四　文学的出発の背景……一一九

第三　観念的発想の陥穽

中村光夫　一　観念的発想の陥穽……一〇二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二　『写実と創造』をめぐって……二〇六
三　作者の責任および文学上の真と嘘……二一〇
江藤　淳　『海賊の唄』のこと……二一四
宮本顕治　青血は化して原上の草となるか……二一七
平野　謙　『政治と文学の間』のこと……二六九
井上光晴　一　先頭部隊の責任……二七六
二　巌流井上光晴……二九二

第四　「何物かを希求する」の魂

長谷川四郎　一　「独自のロマンティック・リアリズム」……二九六
二　長谷川四郎素描……三〇一
野上彌生子　『哀しき少年』のこと……三〇三
齋藤緑雨　緑雨作「小説」一篇……三〇八
大佛次郎　『パリ燃ゆ』小解……三一〇
宮内勝典　「何物かを希求する」の魂……三一七
増田みず子　作中人物にたいする作者の責任……三一九

村上春樹　『羊をめぐる冒険』読後……三三
太宰　治　「二十世紀旗手」の死……三五
大岡昇平　一　『レイテ戦記』への道……三七
二　『ながい旅』読後……三二
三　粟田女王の短歌一首をめぐって……三八

第五　耐えるべき「長命」として

松倉米吉　米吉作「かり妻と並び枕は」一首……三四
A・シーガー　「夭折」について抄……三九
田能村竹田　一　暗香疏影……三四
二　「雲山草堂図」題語……三七
大隈言道　大隈言道のこと……三一
土岐善麿　一　哀果作一首……三五
二　善麿追悼……三七
杉田久女　「秋冷」のこと三度目……三〇
中村草田男　草田男の訃報に接して……三五

與謝野晶子　晶子について二、三の断想……三六八
會津八一　斑鳩小景……三八二
齋藤　史　耐えるべき「長命」として……三八五

第六　「過渡する時の子」その側面

本多秋五　精神の老い……三九二
花田清輝　なくてぞ人は……三九五
中野重治　一　「過渡する時の子」の五十代……三九八
二　「茂吉時代」の終焉……四〇三
三　二、三の挿話……四〇七
四　『鷗外　その側面』のこと……四〇二
五　規約第六十三条のこと……四〇五
六　竹田と大塩との関係……四〇一
七　宴（うたげ）に代えて……四〇五
解題（編集部）……四五一

上巻修正・正誤表……四六一
奥書き（著者）……四六五

観念的発想の陥穽

大西巨人文藝論叢　下

装幀　中島かほる

画　倉本　修

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一　「撩乱たる空虚」への傾斜

三島由紀夫　一

凶事ありし室（へや）

小説家三島由紀夫が自殺した（昨十一月二十五日）。

十一年前、ある短文の中で、私は、「人間の生命は（自他によって）尊重せられるべきであり、その死は厳粛な事柄である。」と書き、さらに「人間の死は、――敵手の死といえども、――哀悼あるいは驚愕せられるに値しよう。」と書いた。私は、そのときそう書いただけでなく、そのずっと前から現在に至るまでそう思ってきている。ただし、それは、汎論ないし原則論であり、その「哀悼あるいは驚愕」は、一般抽象的である。毎日たくさんの人間が死んでいる。自然死があり、病死があり、横死があり、戦死があり、他殺があり、自殺がある。それらの死にたいして、私は、だいたい特殊具体的な哀悼あるいは驚愕を感じない。私は、人間私の冷淡において、または人間私の鈍感において、または最も多く人間私の自然において、特殊具体的な哀悼あるいは驚愕を感じない。

死が私の愛する骨肉とか親しい知友とか尊敬する既知または未見の先達とかに訪れたような場合に、哀悼あるいは驚愕が、私において多かれ少なかれ特殊具体的となる。それが私にとってそれまでは見たことも聞いたこともない赤の他人であっても、たとえばある人が他の人人を助けることのために覚悟上または結果上の死を遂げたような場合にも、言い換えればその死が客観的に意義を持っていた（と私には認められる）ような場合にも、哀悼あるい

は驚愕は、私において特殊具体的であり得る。そしてまたそのような死は、私にとって特殊具体的に厳粛な事柄でもあり得る。

三島は、私にとって、見たこともない赤の他人であったとはいえ、聞いたことも読んだことも大いにある小説家であった。三島の自殺は場所も手段も尋常でなかったから、私は、多少の偶発事件的なおどろきを覚えた。しかし、私は、特殊具体的な哀悼をまったく覚えなかった。したがってまたその死は、私にとって特殊具体的に厳粛な事柄では少しもあり得なかった。もしも三島がたとえば交通事故の被害によって亡くなったのであったならば、それにたいして、私は、いささか特殊具体的な哀悼あるいは驚愕を覚えたにちがいなかろう。しかも一般に交通事故の被害による落命は、生前の当人（被害死者）自身によって選択決定せられたことでは全然ないのである。

最近私は、現代諸家作品選集『兵士の物語』（立風書房近刊）を編集し、その編集後記代わりの小論文『軍隊内階級対立の問題』を三島自殺の前前日に脱稿して出版社へ渡した。

仔細があって、私は、右小論文の一節を左に掲げる。

ちなみに上述のような「軍隊内階級対立」あるいは「階級社会としての軍隊」という類の有意義な命題における用語「階級」は、もちろんたとえば『共産党宣言』における用語「階級（社会階級）」とおなじ物であり、決してたとえば「凡軍人には上元帥より下一卒に至るまで其間に官職の階級ありて統属するのみならず」云云（『勅諭』）における用語「階級（官等級）」とおなじ物ではない。これは、ほとんど「言うもおろか」なことである。ところが、下のごとき珍妙低級なやり取りが、『対談〝軍隊を語る〟』（『伝統と現代』一九六九年九月号）の中で臆面もなく行なわれている。

末松太平　（前略）たとえば、軍隊は階級社会といわれている。上は元帥から、下は一兵卒にいたるまで、階級でつながっている。すると、それをもって左翼の人は、軍隊はひどい階級社会じゃないか、と攻撃す

るわけです。しかし、マルクスの言う階級と、軍隊の階級と、根本的に違うんですよね。

三島由紀夫　全然違うですなあ。

末松　それを日本人が、〃階級〃っていう字が同じものだから、軍隊の階級に当てはめる。しかし、軍隊の階級というのは、〃支配〃のための階級じゃない。

三島　もっとプラクチカルなものですな。

末松　これは、〃奉仕〃の体系ですから、いわゆる国家に奉仕しよう、という形態の階級ですからね。いわゆる支配の階級じゃなくて、連隊長が兵隊を支配するためにあるのではなくて、国防の任に従事するために、ああいう階級をつくった。全然違うんですわね。（後略）

最初私は、『私の昭和史』の著者末松のそういう浅薄粗笨（そほん）な言いぐさに恐れ入って一驚した。しかしやがて私は、それが人間ならびに旧陸士出身帝国軍人としての末松の自然において発言せられたにちがわぬことを物悲しく合点した。二・二六事件首導少壮将校たちにたいする「判決書」の「理由」の中に、「（首導少壮将校たちは）尚此間軍隊教育ニ従事シ兵ノ身上ヲ通シ農山漁村ノ窮乏、小商工業者等ノ疲弊ヲ知得シテ深ク是等ニ同情シ就中（ナカンヅク）一死報国共ニ国防ノ第一線ニ立ツベキ兵ノ身上ニ後顧ノ憂多シト為シ」（『日本政治裁判史録〔昭和・後〕』所収――傍点大西）という文言がある。二・二六事件連坐者末松による前掲のごとき無知蒙昧な見解の表白は、同事件首導少壮将校連における件（くだん）の「知得」および「同情」の本質と限界との消極性を三十余年後の今日から遡行的に赤裸裸に照射しているようである。

末松とのかくのごとき応対や今回の「檄」やその他によっても、三島の軍隊兵隊認識が、二・二六事件首導少壮将校たちのそれよりすらも、またいっそうずいぶん観念的・非現実的であった、ということは、明白である。そしてそのことが、歴史的・社会的現実にたいする三島の認識一般の観念的非現実性を如実に表象している。今春三月

十九日の本紙本欄（『観念的発想の陥穽』）で、私は、三島筆『〝贋の偶像〟について』中の枢要な一例と三島作『奔馬』中の卑近な一例とを取り上げて、三島の文芸活動総体における「美」の正体のいかがわしさおよび三島の主観と歴史的・社会的現実との分裂を小手調べ的に指摘した。またそこで私は、当人の主観と歴史的・社会的現実との分裂が理論上ならびに実践上の小市民的急進主義ないし無頼漢的歪曲主義の恒常的要因である、ということを端的に指摘した。いまいよいよ私は、私の指摘の正当性を疑わない。

言うまでもなく三島の文学の値打ちは、三島の自殺によって、ちっとも上がりも下がりもしはしない。この豊富な一種の才能を持った作者の作業は、『金閣寺』からのち、あるいはむしろ『仮面の告白』からのち、下降の一途を辿りつづけ、『英霊の声』、『朱雀家の滅亡』あたりから加速度的に崩潰の相を深めた。『豊饒の海』既刊三冊における仮象的華美の内実を主として支配しているのは、無慙な文学的衰弱の喘ぎである。岡本かの子の文学に関する宮本百合子の「撩乱たる空虚」という言葉を、私は、ここで思い合わせる。おなじ言葉を、私は、三島の自殺についても思い合わせる。

一般に人間の死は、――敵手の死といえども、――哀悼あるいは驚愕せられるに値しよう。だが、哀悼あるいは驚愕するのは、生者であり、生者は、なお耐えて生きねばならない。「脇差（わきざし）の少しぬきたる刃（は）の上に蓮華（れんげ）ぞうつる凶事ありし室（へや）」（木下利玄）。

（一九七〇年十一月二十六日）

〔追記〕

本文中に、私は、「敵手」の語を用いた。明らかにここの「敵手」は、enemy の意であり、rival の意ではない。また明らかにここの「敵手」は、人間の死一般に関して用いられていて、必ずしも三島の死自体に関して用いられてはいない。ついで言えば、私は、三島を（文学上の）rival の意における「敵手」とは――まして「好敵手」とは――かつて毫（ごう）も認めも考えもしたことがない。

（一九七一年一月上旬）

三島由紀夫　二

模糊たる太陽

故三島由紀夫様

貴兄の生前、私は、ついにお会いする機会がなかった。つまり、私は、まったく貴兄に面識がありませんでした。ただし、一度（一往返）だけ、文通がありました。

それは、三十数年前、たしか一九四六年の暮れか一九四七年の浅春か――貴兄が『煙草』、『贋ドンファン記』、『岬にての物語』を発表せられてからしばらくのち――のことでした。そのころ綜合雑誌『文化展望』が九州福岡の三帆（みほ）書房から発行せられていて、私は、その編集を担当していました。それで、私は、編集者として、短篇小説一つの寄稿をお頼みしたのでした。

貴兄からは、貴兄一流の（のちに私が文学全集本などの写真製版で何度か目を留めることになった）折り目正しい手蹟（しゅせき）で、〝「生来の寡作」のため残念ながら注文に応じることができない〟という旨の返信を頂戴しました。すなわち一度だけの文通は、私信の一往返ではありませんでした。

貴兄の生前、私は、三度ほど、どれも甚だ短く貴兄（の作品または言論）について書きました。そのうちの一つ『言語表現について（一　詞（ことば）の由来吟味）』は、初め文学雑誌『新日本文学』（一九六九年十月号）に掲載せられ、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com